



我れ等が「伊藤さん」を惜しむ…

「当同窓会の顧問伊藤博胤氏(88歳・日本社会事業大学本科10期1959年卒業)におかれましては、令和7年5月30日ご逝去されましたので、謹んでお知らせいたします。」

という悲しいお知らせが、北海道同窓会にも届きました。

伊藤さん（敢えて、いつも通りに「さん付け」とします）は、上記の如く、我々にとっては社大の大先輩であり、当時の学生にとっては、いつも大変にお世話になっていた学生課に所属する社大職員でもありました。

また、北海道同窓会の顧問も務めていただき、セミナー等の際には何度も、北海道にも来ていただいた方、です。

このたびのご逝去を受け、伊藤さんに最も近い木村同窓会副会長（学部15期）に、「追悼の文章」を依頼しました。しかし、伊藤さんにあまりにも近すぎ、思い出だけで涙が出てくるという理由で、「どうしても、文章は書けない」と言われてしまいました。ついては、大変僣越ではあるものの、伊藤さんのご親族に書いた高田の文章を掲載させていただくことをお許しください。

このたびは、「伊藤さん」のご逝去の報に接し、たいへん驚くと共に、とても悲しく、ただただ突然のことでまだ信じられない気持ちで一杯です。

心よりお悔やみ申し上げます。

私は、社大の15期生（71年入学）であり、1年生のとき以降ずっと、伊藤さんには大変お世話になってきました。

伊藤さんは、社大の先輩であったこともあり、学生に対してはとっても親切であり、学生は何かあればなんでも、伊藤さんを頼っていました。

そんな4年間を、原宿で過ごしたのです。

卒業後は、北海道に戻り、地元の公務員として勤務していました。

あるとき、仲村優一先生が来道されるということで、同窓会に初めて呼ばれました。

それ以降、「北海道同窓会」のメンバーとなりました。

そして、私自身が幹事的役割を果たすことになる、様々な場面、様々なイベント等で、伊藤さんをまた頼ることとなったのです。

道同窓会の特別顧問にもなっていていただき、こちらでの企画の際には何度も来道していただきました。高校訪問にも同行してもらいました。

また、社大で行われる年に1回の同窓会の会議等の際には、社大でお目に掛かることができました。

伊藤さんは、色々な肩書きはお持ちではあったものの、我々社大の同窓生にとっては、やはり、「伊藤さん」がしっくりきます。

このたび、同窓会事務局からの知らせで、ご逝去の報に接しました。

社大の卒業生として、とりわけ、伊藤さんには面倒を看てもらっていた私ですから、本来ならば、葬儀に駆け付けなければならない立場です。

ただこのたびは、お身内のみで執り行うとのことでもありますので、本当に残念ではありますが、これまでのお礼の気持ちのみ、送らせていただきます。

繰り返しにはなるものの、71年の入学以来、半世紀に亘って、伊藤さんには物凄くお世話になりました。本当にありがとうございます。

伊藤さんのご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(2 Jun. '25)

伊藤さんに教えてもらった「社大節」を捧げる

ニッポン社大の玄関で
ハンケチ片手に目に涙
どうか彼氏に会わせてよ
彼氏の名前は 伊藤さん

会わせてやるのは安けれど
もしも五味さんに知られたら
オールドミスの僻みから
アンタの彼氏は退学よ

初めて会ったのは松窓寮
二度目に会ったのは東郷神社
もうじきお腹も2、3ヶ月
どうしてくれるの 伊藤さん

心配するな 心配するな
もしも男ならケースワーカー
女の子なら保母さんよ

どっちが出来ても国のため

国のため

この歌は、当時の社大生にとっては、「第2の校歌」と言っても過言ではない歌です。

ただし、今日では、この歌詞は時代に合わないばかりか、「問題あり」と言われてしまうかも知れません。

しかし、伊藤さんに、「東京社大の玄関で…」ではなく、「につぼん社大の玄関で…」と教えてもらったことを、我々後輩は大切に、この歌を今でもコッソリと唄っています。

したがって、我れ等が伊藤さんに、この歌を心から捧げたいと思います…。

「25年度北海道同窓会秋季セミナー」を開催

時は、去年に遡ります。

大橋先生が来道され、いつものように「囲む会」を催したとき、「コロナも一段落したことだから、来年こそ、セミナーを開催しなさい」、「それも、社大単独ではなく、全道の関係者にも呼びかける形で」と、先生より指示・指導がありました。

「はい、解りました」と返辞をし、社大関係者には、「年内には一度集まろう」と提案はしました。しかし、みな多忙であり、気が付いたときにはもう、25年度に入っていました。

歳月人を待たずの謂いにあるように、時間だけは過ぎ去っていき、結果、一部の関係者にはお願いはしたものの、このたびに限っては、「社大道同窓会単独で」ということで、9月27日（土）を迎えたのでした。

当日は、日本医療大学月寒キャンパスの教室をお借りして、2つの講演を行いました。

その1は、瀬戸道同窓会会長の「災害救助法改正で社会福祉サービスの提供はどうなるのか」です。

そして、その2は、大橋先生による、「地域共生社会における重層的支援体制整備事業とコミュニティソーシャルワーク」でした。

ともに、膨大な資料を用意してくれたため、それらをここで逐一披露して行くことは、紙面の都合で出来ません。大変申し訳ありません。

したがって、当日の資料を読みたい、学んできたいという方は、大変恐縮ではありますが、当事務局あてにご請求ください。

Mailにて、送付させていただきます。

ただ、この2つの講演は、今日の社会福祉にとっては極めて重要なことだらけ、でした。

というのも、正直な処、今日の社会保障制度は、政治の歪みの許、劣化の一途を辿っており、社大で社会福祉理念を学んだ人間にとっては、どうしても「建て直し」をしなければならない状況にあります。

その点では特に、大橋先生の2時間半に及ぶ講演は、大変に示唆に富んだものであり、社会福祉の原点回帰をめざすに当たっては、しっかりと受け止め、ここから多くを学ぶことができる極めて重要なお話でした。

ついては、当日参加してくれた若い人たちがこの講演をどのように感じ、自分たちはどうしていきたいのか、を投稿してもらいましたので、これらも参考にしてください。

「秋季セミナー」に参加して得たもの

渡邊 建司（士別市社会福祉協議会総務課地域福祉係主任）
（北海道教育大学旭川校生涯教育課程健康福祉コース3期生）

「本人のニーズを起点に支援を調整すること」、「伴走型支援」、これらは「ソーシャルワークだろう!」

大橋先生節が炸裂した講演会でした。

私は介護保険が始まった翌年の2001年に上記大学に入学し、2005年に学部を卒業しました。その後、私立高校で5年間、社会福祉の教鞭を執り、その後、士別市にある障害者支援法人で主に相談支援専門員として12年勤務し、2022年からは士別市社会福祉協議会（以下「社協」）で勤務して、まだ4年目の現在42歳です。

障害者支援の現場と社協事業をどう結び付けるかということをテーマに、某通信制大学院で学んでいる私としては、大橋先生のお話の最初に出てきた、「大学と現場を循環させるための『リカレント教育』」の重要性に妙に納得させられたと同時に、行き詰っている大学院の研究を思い浮かべ、胃が痛くなる思いでした。

しかし、実践と研究をどう結び付けていくのかという課題は、支援の質を向上させるために必要不可欠であるということを改めて考えさせられました。

講義の中では、「縦割りは通用しない!」、そして、「総合相談っていうけれど、窓口で待っているだけでは総合相談とは言えない!」といった激しくも真っ当なご指摘にも、おっしゃるとおりと心の中で拍手していました…。

行政の縦割りはしばしば話題に上がります。では、みなさんのマチでは、「社協」が縦割りになってはいませんか？ 恥ずかしながら、私がいる社協では、溝があるわけではないものの、地域福祉、在宅サービス、成年後見センターが、それぞれに独自に活動しており、連携した取り組みはなかなか行えていないのが実情です。さらに、総合相談の在り方についても、必要性は強く感じており、寄せられる相談も複合的なものも多くあり、連携して対応しているものの、「オール社協」での実施はできておりません。

最近の社協におけるトピックといえば、「社協基本要項2025」の策定でしょう。1992年の「新・社協基本要項」から、約30年ぶりの改定となります。この活動の原則には、「個別支援と地域づくりの一体的展開の原則」が定められており、まさにコミュニティソーシャルワークの推進が掲げられました。さらに、社協の機能に、相談支援、権利擁護、災害時の支援が新たに加わりました。

活動の充実が求められる社協ですが、大橋先生の話にもあったとおり、「行政が社協に補

助を出す根拠がない」として、補助がカットされている例も少なくありません。行政とのパートナーシップが強調された基本要項なのに、何故うまくいかないのでしょうか…。本当に何故なのでしょう？

これからの社協活動に必要なことはなんでしょう？

現在多くの社協の悩み事は、1992年前後から求められてきた「事業型社協」への転換により、2000年の介護保険法導入時に多くの社協が取り組み始めた介護保険事業の減収です。

当社協においても、2016年を境に赤字に転落し、コロナ禍を経ても黒字化が難しい状況であり、経営の視点が求められるのが現状です。各市町村社協は、介護報酬の減少に対応すべく様々な手を打っています。私たちもそこに目を向けざるを得ません。

他方、本来の地域福祉活動は、人口減、超高齢化、自治会の組織率の低下などを背景にして、地域における支え合い活動の推進がますます厳しい状況になっています。

その流れの中で、「基本要項2025」があります。何に照準を当て、どこに向かっていけばいいのか…、さまよっているといっても過言ではありません。

ここで必要となるのが、「総合相談機能を持ち、地域をベースに縦割りに対応しない」社協の姿なのかなと考えていました。まさにカタカナでいうと、「アウトリーチ」というもののなのでしょう。ただし、これまで社協という組織は住民と一緒に、様々な相談に応じ地域の中で悩みながら進んできた組織です。しかし、それでも至らないことが多く、機能不全を起こしている社協もたくさんあります。

大橋先生の講演を通して感じたことは、「古くて新しいもの」、「新しく古いもの」が混在している状況で、何が必要なのかを歴史から読み解き、見極める力が必要だということです。

そのためにはやはり、「学ぶこと」なんだな〜と。そんなこんなを思い浮かべながら、30分延長した2時間半の長丁場の講義が終わりました。

その後の懇親会…、です。

学部時代に大変お世話になった、村上氏、高田さん（学生時代より「さん付け」にしろと）に久々にお会いできて現状報告もできました。村上氏に「社協はこれからどうするんだ？」と唐突に聞かれ戸惑う私であり、しどろもどろに答えました。日々修行ですね…。高田さんからは、昔と変わらずお酒の呑み方のご指導をいただきました。大橋先生からは「社大に入れ、中退でも同窓生だ!」と何とも言えないオファーをいただき、パンフレットを取り寄せようと思います。

また、用事があって参加できなかった大内氏、大野木氏、田原氏などと話ができなかったのは残念である一方、東京からいらした宮武氏とも話ができただことは大変に有難いことでした。

その後の二次会でも、木村氏、白戸氏、田中氏、浪江氏、西中氏などの諸先輩が現場の話で盛り上がっていたり、大橋先生が忍氏に喝を入れていたり、楽しい雰囲気でした。

よくよく考えてみました。

「学ぶこと」とは、何か。

お酒を酌み交わしながら、将来の社会福祉のこと、ソーシャルワークのことを熱く語るおじさん&おじいさんたち（失礼!）の姿が印象的でした。そして、この方々の強い「つながり」に感銘を受けました。瀬戸会長を先頭にしてみなさん、北海道の社会福祉、ソーシャルワ

クを真剣に語る姿がそこにはありました。

「ソーシャルワークを語る」

生意気にも、若輩の私が考えていることも、諸先輩方に聞いてもらう場面もありました。先輩、後輩、ほかの大学の卒業生など、そうしたことに関係なく語り明かした大変貴重な時間となりました。

障害者の相談支援を行っていた時に、「地域とどのようにつながるか」をよく考えていました。今は、地域の人たちと関わる場面は多くなり、障害のある人たちと関わるのが減ってしまいました。

これらがバランスよく連携を図り、地域の人たちとの交流が進むこと、もっと言えば、障害のあるAさんではなく、Aさん障害はあるけれど地域で暮らしているAさんである、という理解で、地域の人たちみんながその地域に溶け込んで生活していくことが、本当の意味での「地域共生社会」ではないかと考えています。

そのために、私たち社協職員、つまりは、コミュニティソーシャルワーカーと現場のワーカーが「つながって（＝お酒を酌み交わして?）」語り合っていくことが大切だと改めて考えさせられる1日となりました。

課題は様々あるものの、「現場第一」で、今日も元気でニコニコと仕事をしていこうと思います。

拙い文章ながら、感謝の気持ちを込めて記しました。

講演会も、懇親会も、大橋先生を始め、諸先輩から多くを学べて、参加できて本当にありがとうございました。

秋季セミナー「大橋講演」を聴いての思い

大野木 香澄（小樽市東南部地域包括支援センター介護支援専門員
（名寄市立大学保健福祉学部社会福祉学科第1期生）

先日、「地域共生社会政策におけるコミュニティソーシャルワーク」と題された、大橋謙策先生の講演を拝聴する機会を得ました。

地域包括支援センター（以下、包括）の職員という立場から、日頃の業務と直結するテーマであり、大きな関心を持って臨みました。講演は、リカレント教育の必要性和、地域共生社会の実現に向けた包括の役割、特にその中でのアウトリーチによるニーズ把握の重要性に焦点を当てたものであり、現在の私たちの取り組みを見つめ直す、大変示唆に富む内容となりました。

講演の中で、まず印象に残ったのは、地域共生社会の複雑な課題に対応し続けるためのリカレント教育の必要性についてです。

社会構造が絶えず変化し、生活課題が複合化する現代において、専門職である私たちもまた、常に知識とスキルをアップデートし続ける責務があります。特に、包括の職員は、医療、介護、社会福祉といった多岐にわたる分野の専門的知識が求められる上に、地域住民の生活課題の最前線で、その解決に向けたコーディネート役を担います。

大橋先生は、単に既存の知識を繰り返すのではなく、社会の変化を敏感に察知し、新たな視点や技術を習得していくことの重要性を強調されていました。これは、地域社会の「孤立」や「複合的な困りごと」といった新たな課題に対し、過去の成功体験だけに頼ることなく、柔軟に対応していくための土台となります。

包括の職員は往々にして、目の前の多忙な業務に追われがちです。しかし、質の高い支援を提供し続けるためには、組織として、また個人として、学び続ける姿勢を決して忘れてはならないと再認識させられました。専門職としての力量を高め、地域住民からの信頼に応えるためにも、リカレント教育への積極的な取り組みが不可欠なのです。

次に、地域包括支援センターの役割、特にアウトリーチを通じたニーズ把握に関する指摘は、包括職員として最も考えさせられる部分でした。大橋先生は、包括が地域共生社会の中核として期待されている一方で、従来の待機型の対応に留まりがちである現状を厳しく指摘されました。

真に必要な支援が届いていない層、いわゆる「見えないニーズ」を掘り起こすためには、「もっとアウトリーチをしてニーズ把握をしていくべき」という力強いメッセージは、心に深く響きました。

包括は、高齢者の総合相談窓口として、介護保険サービスだけではなく、地域住民の生活全般の困りごとを受け止め、包括的かつ継続的な支援を提供することが求められています。

しかし実際には、相談件数の増加、煩雑な事務作業、そして限られた人員といった構造的な課題の中で、どうしても「来所した人」、「相談してきた人」への対応が中心となりやすい傾向があるのも事実です。地域の中には、制度の存在すら知らない人、支援を求めること自体がためらいを感じる人、あるいは認知症や生活困窮などで自ら声を上げることが難しい人等が数多く存在しています。

大橋先生からの「もっとアウトリーチを」という言葉は、私にとってはまさに「耳の痛い」部分を突くものでした。地域を隅々まで回り、潜在的なニーズを掘り起こすことの重要性は理解してはいるものの、現状では十分な対応ができていないという自覚も、職員の中にはあります。しかし、この「耳の痛さ」は、現状に安住せず、支援のあり方を変革していくための重要な警鐘であると受け止めなければなりません。地域共生社会の実現は、包括がその機能と役割を最大限に発揮できるかにかかっているのだらうと思います。

大橋先生が提唱されるコミュニティソーシャルワーク（CSW）は、包括が目指すべき姿の明確な羅針盤となります。CSWは、個別のケースワークにとどまらず、地域住民と共に課題を共有し、資源を発掘・創出することで、地域全体の課題解決能力を高めていく実践です。この実践を包括が担うためには、やはり「待っている」姿勢から脱却し、地域に出向き、人々と対話し、関係性を構築するという積極的な行動、すなわちアウトリーチが不可欠となると考えます。

アウトリーチは、単にチラシを配る行為や、形式的な戸別訪問ではありません。それは、地域住民一人ひとりの生活の実態に目を向け、お互いの信頼関係を基盤として、「共に考える」、「共に行動する」というソーシャルワークの根幹に関わる活動です。地域住民が抱える複合的な課題を解決に導くには、地域の「顔役」や「キーパーソン」との連携はもちろん、地域住民一人ひとりが「互いに支え合う」という意識を醸成することが求められます。包括職員として、つまりは、コミュニティソーシャルワーカーとして、私たちがその触媒となるべ

きだと、強く感じました。

今回の講演は、私にとって、自己の業務を見つめ直し、新たな決意を固める貴重な機会となりました。大橋先生の示された理念・理想と、現在の包括の現実との間には、確かに大きな隔たりがあるかもしれませんが、しかし、その隔たりを嘆くのではなく、一步ずつ埋めていく努力が今、求められています。

「もっとアウトリーチを」という指摘を胸に刻み、まずは出来ることから一つずつ、実践に移していきたいと考えています。例えば、これまで以上に地域住民が集まる場への積極的な参加を増やし、包括の存在を身近に感じてもらう機会を作ること、地域の小規模なサロンや集まりに顔を出し、日常的な会話の中から、制度では拾いきれない生活の「声」を聴く努力を始めること、そして、その小さな声を地域や関係機関と共有し、「支え合いの仕組み」へと昇華させていくことを心掛けていきたいと思いました。

包括が真に地域共生社会の「かなめ」となるために、私たちは専門職としての研鑽を怠らず、地域住民と共に歩む姿勢を堅持していきます。

そして、このセミナーを契機として、コミュニティーソーシャルワーカーとして、その責務を全うしていきたいと強く思いました。

大橋先生、貴重なご講演、誠にありがとうございました。

*** 編集後記 ***

先にも書いたように、このたびの「秋季セミナー」は、道同窓会単独主催で実施しました。

しかし結果的には、当日のZoom（原田さん、ありがとうございます）も含めて、たくさんの関係者が参加してくれました。

ついては、これからの（少なくとも）北海道の社会福祉を担っていくであろう「社大外」の、若い2人に、セミナーの感想とこれに基づく決意を書いてもらいました。

大変お忙しい中にも拘わらず、「遣ってくれ」と強めに依頼した結果、上述のような素晴らしい文章を書いてくれたことに対して、心より感謝申し上げます。

なお、道同窓会としては、来年度も「セミナー」を、それも「オール北海道」で実施していくことが出来るよう、最善の努力をしていく所存です…。

今後とも、何とぞよろしくお願いします。

